

平成 2 1 年度病虫害発生予報第 7 号

平成 2 1 年 8 月 2 1 日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要 [参考]

| 区 分 | 農 作 物 名 | 病 害 虫 名 | 発 生 時 期 | 予 想 発 生 量 |
|------|------------------------|------------|---------|-----------|
| 普通作物 | イ ネ | いもち病（穂いもち） | 遅 い | 平 年 並 |
| | | 紋枯病 | - | やや多い |
| | | トビイロウンカ | - | 少ない |
| | ダイズ | 斑点米カメムシ類 | - | 平 年 並 |
| | | 紫斑病 | 平 年 並 | 平 年 並 |
| | | ハスモンヨトウ | 平 年 並 | 平 年 並 |
| 果 樹 | ナ シ | カメムシ類 | - | やや少ない |
| | | 黒斑病 | - | やや多い |
| | | 黒星病 | - | 多 い |
| 野 菜 | キャベツ、ブロッコリー ネギ、ナガイモ | シンクイムシ類 | 平 年 並 | 平 年 並 |
| | | ハスモンヨトウ | やや早い | 平 年 並 |
| | | シロイチモジヨトウ | 平 年 並 | 平 年 並 |

気象予報（抜粋）

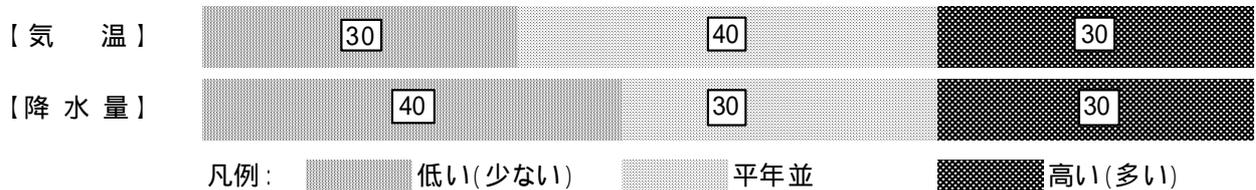
1 か月予報（8月15日～9月14日：8月14日、広島地方气象台発表）

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

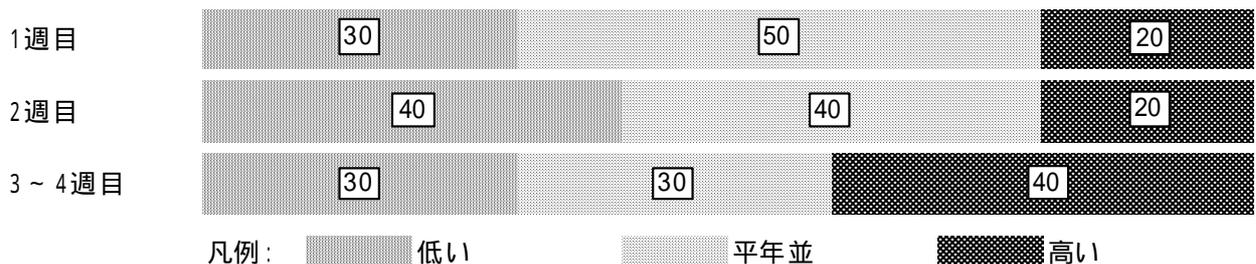
平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

週別の気温は、1週目は平年並の確率50%、2週目は平年並または低い確率ともに40%です。

< 向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率 (%) >



< 気温経過の各階級の確率 (%) >



普通作物

[イネ]

1 いもち病（穂いもち）

(1) 予報の内容

| | |
|------|------|
| 発生地域 | 県下全域 |
| 発生時期 | 遅い |
| 発生量 | 平年並 |

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、葉いもちの発生ほ場率は31.2%（平年：34.7%）で、平年並の発生であった。一部の間接地～山間地では、病勢が終息していないほ場が認められているが、全体としては下位葉の発病が主体となっている。

イ 梅雨明け以降も、8月第3半旬頃まで曇雨天で経過したことから、大半の地域で出穂期～穂揃い期が穂いもちの感染に好適な気象条件となった。しかし、向こう1週間の気象予報（8月19日発表）によると、8月第4半旬以降は少雨で経過することが予想されており、穂いもちの発生は平年並になるものと予想される。

ウ イネの出穂期は平年に比べて遅れている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 中生品種、遅植えなどで出穂を迎える地域では、出穂前後の防除を徹底する。

イ コシヒカリなどで葉いもちの発病が多く、穂いもちの多発生が予想される場合は、傾穂期の防除を追加する。

ウ 降雨が続く場合は、雨の止み間をみて防除を行う。この場合、散布後約3時間経過すれば、降雨の影響は少ない。

エ 防除薬剤は、病害虫発生予察注意報第3号（8月3日発表）を参考とする。

2 紋枯病

(1) 予報の内容

| | |
|------|------|
| 発生地域 | 県下全域 |
| 発生量 | やや多い |

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地における発生ほ場率は21.2%（平年：37.8%）で、平年に比べてやや少なかったが、その後発生が増加し、発病株率の高いほ場が散見される。

イ 8月11日現在、県予察ほ場（鳥取市橋本）における発生は平年並である。

ウ 出穂期の遅れにより、防除時期も遅くなったことから、病斑高率が平年より高く推移することが予想される。

エ 向こう1か月の気象予報から、平年と同様に、本病の発生に好適であると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

残暑などにより病勢進展が衰えず、出穂後の防除が必要な場合には、農薬登録のある粉剤などにより追加防除を行う。

3 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

| | |
|------|-------------|
| 発生地域 | 県下全域（特に平坦部） |
| 発生量 | 少ない |

(2) 予報の根拠

ア 8月第1半旬現在、予察灯への誘殺は認められていない。

イ 8月上旬現在、現地ほ場での発生は確認されていない。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 現在、本種を対象とした防除は必要ない。しかし、ほ場間差が大きいため、各ほ場における生息密度に注意し、今後の病害虫発生予察情報を参考にする。

イ 8月下旬以降の要防除水準は、成幼虫数10頭/株である。要防除水準を超えているほ場では、農薬登録のある粉剤などを使用して防除を行う。

4 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月上旬現在、早植え、極早生品種栽培ほ場での発生ほ場率は77.8%で、要防除水準(捕虫網50回振りすくい取り虫数が4頭以上)を超えているほ場率は40%で、平年並の発生であった。

イ 向こう1か月の気象予報から、カメムシ類の水田への飛来、イネへの加害活動に好適な条件となると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 現在、出穂期～穂揃い期を迎えているほ場(中生品種、遅植えなど)では、穂揃い期～乳熟初期の基本防除を徹底する。その後も発生が多い場合には7～10日間隔で1～2回の追加防除を行う。なお、出穂前の防除は効果が期待できない。

イ 穂揃い期に殺虫殺菌混合剤を使用する場合は、いもち病防除にも考慮して薬剤選択をする。

ウ ネオニコチノイド系の粒剤を使用する場合は、出穂期～出穂7日後に湛水散布を行う。なお、大型のカメムシ類に対しては防除効果が劣る。

エ 要防除水準は、捕虫網50回振りすくい取り調査で4頭以上である。

オ 水田内で穂をつけたヒエ類は、カメムシ類の発生を助長するので直ちに取り除く。

[ダイズ]

1 紫斑病

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 大豆の開花期は平年並であった。

イ 向こう1か月の気象予報から、本病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除に水和剤を用いる場合は、開花期後25～35日に1回、アミスター20フロアブル2,000倍液(100L/10a)又は同剤3,000倍液(150～300L/10a)を散布する。なお、薬液には展着剤を加用する。

イ 防除に粉剤を用いる場合は、マネーグトレボン粉剤DLを開花期後25～30日に1回散布する。

ウ 紫斑病とカメムシ類を同時防除する場合は、カメムシ類の項を参照する。

2 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア ダイズほ場では、平年並の8月上旬より幼虫の発生が認められた。

イ 7月第1半旬～8月第2半旬までのフェロモントラップへの総誘殺数は平年並であった。

ウ 8月中旬現在、発生ほ場率は41.7%（平年：37.8%）で、平年並であったが、白変か所数は0.1か所/a（平年：0.3か所/a）で平年よりやや少なかった。

エ 向こう1か月の気象予報から、本種の発生に好適であると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 若齢幼虫の加害によって発生する白変葉の早期発見に努め、発生初期の場合、葉の切除などによる捕殺を行うか、農薬登録のある粉剤、水和剤のスポット散布を行う。

イ 防除の目安は、1a当たりの白変葉か所数3～5か所以上とする。なお、新葉の出葉により、白変葉が確認されにくいほ場が多いので、観察にあたっては、ほ場周辺からの観察のみならず、ほ場内での観察も行う。

ウ 若齢幼虫に対する登録農薬の効果は高いが、齢期が進むと防除効果が低下するため、防除適期を逸しないようにする。

3 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 8月上旬現在、現地ほ場ではホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ、アオクサカメムシの発生がみられ、発生ほ場率は12.1%（平年：43.5%）で、平年に比べて少ない発生であった。

イ 5月上旬～8月上旬までの予察灯への総誘殺数は平年並となっている。

ウ 向こう1か月の気象予報から、カメムシ類の発生に好適であると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 近年、9月以降にカメムシ類の密度が急増する傾向がみられるので、今後の発生に十分注意する。

イ 防除にネオニコチノイド系殺虫剤の水和剤を使用する場合、開花期後30～35日の1回防除を基本とし、紫斑病防除薬剤（アミスター20フロアブル2,000倍）とカメムシ防除剤（ダントツ水溶剤又はスタークル顆粒水和剤の2,000倍）の混用液を100L/10a散布する。カメムシ類の発生が多い場合は、初回散布の10日後にネオニコチノイド系以外の水和剤（薬液量：150～300L/10a）・粉剤を散布する。

ウ 防除にネオニコチノイド系殺虫剤以外の水和剤を使用する場合、開花期後の2回防除を基本とする。1回目は、開花期後25～30日に紫斑病防除薬剤（アミスター20フロアブル3,000倍）と、農薬登録のある水和剤の混用液を150～300L/10a散布する。2回目は、1回目防除の10日後に、水和剤又は粉剤を散布する。

エ 水和剤を使用する場合、薬液には展着剤を加用する。

オ 防除に粉剤を使う場合、2回防除を基本とする。1回目は開花期後25～30日にマネーグトレボン粉剤DLを散布する。2回目は、1回目防除の10日後に農薬登録のある粉剤を散布する。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発 生 量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬における巡回調査の結果、新梢葉の平均発病率は4.7%であったが、発病葉率が20%以上の多発園も認められる。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 新梢葉及び収穫果実の発病を防ぐため、収穫前の薬剤散布を徹底する。

イ 薬剤は、8月下旬にアミスター10フロアブル1,500倍液又はストロピードライフフロアブル3,000倍液などを散布する。

2 黒星病（平成21年8月6日付、病害虫発生予察注意報第4号発表）

(1) 予報の内容

発 生 量 多 い

(2) 予報の根拠

8月中旬における巡回調査の結果、一部で多発園が認められる。

(3) 防除上注意すべき事項

病害虫発生予察注意報第4号を参照。

3 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発 生 量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、フェロモントラップにおけるシンクイムシ類成虫の誘殺数はほぼ平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報によると、ナシヒメシンクイの第3世代成虫（第4回成虫）の発生時期は、平年並の8月下旬～9月中旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ナシヒメシンクイの発生盛期となる8月下旬～9月中旬の防除を徹底する。

特に、昨年被害が多かったナシ園では、本年も被害発生が懸念されるので注意する。

イ 薬剤はアグロスリン水和剤2,000倍液などを散布する。なお、薬剤の散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守する。

野 菜

[キャベツ、ブロッコリー]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、県予察ほ場（北栄町）及び現地ブロッコリーほ場におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である

イ 現地ブロッコリーほ場において卵塊や若齢幼虫による食害が散見されており、発生時期は平年と比べてやや早い。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の防除効果が高い若齢幼虫期のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、被害がみられた場合には直ちに防除を行う。

イ キャベツでは、若齢幼虫期にアタブロン乳剤2,000倍液、ノーモルト乳剤2,000倍液などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合にはトルネードフロアブル2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液、マトリックフロアブル2,000倍液などを散布する。

ウ ブロッコリーでは、プレオフロアブル1,000倍液、カスケード乳剤4,000倍液などを散布する。

[ネギ、ナガイモ]

1 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、県予察ほ場（北栄町）におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。

イ 県予察ほ場及び現地巡回ほ場において幼虫による食害の発生は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 幼虫が若齢の時期に防除を行う。これを逃すと防除が困難となる。

イ ネギでは、プレオフロアブル1,000倍液、トルネードフロアブル1,000倍液、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液などを散布する。

ウ ナガイモ（ムカゴを含む）では、デルフィン顆粒水和剤1,000倍液を5～7日間隔で2回程度散布する。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、
周辺への飛散には充分注意しましょう。**

< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報やフェロモントラップの調査結果(野菜・シバの各種害虫、果樹のシンクイムシ類)、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647

E-mail : boujyot@titan.ocn.ne.jp

次回の予報発表は、9月10日(木)の予定です。